

知求会ニュース

2017年9月

第63号

◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

久好 孝子 (*HISAYOSHI Takako*) (国際学部国際文化学科・第3期生)さんが、2013 (平成25)年3月27日(水)に東北大学大学院国際文化研究科で、以下のように学位を取得されました。

学位名：博士 (国際文化)

学位番号：甲第15307号

学位授与機関：東北大学

学位授与日：2013年3月27日

論文名：指示対象の識別方略：日本語・英語・韓国語の対照研究

なお、現職は東洋大学国際教育センター講師です。

李 賢峻 (*LEE Hyun Jun*) (国際学部国際文化学科・第6期生)さんが、2015 (平成27)年9月24日(木)に東京大学大学院総合文化研究科で、以下のように学位を取得されました。

学位名：博士 (学術)

学位番号：博総合第1418号

学位授与機関：東京大学

学位授与日：2015年9月24日

論文名：描かれる舞姫、描かせる舞姫—崔承喜 (1911-1969) における朝鮮文化の表象

なお、現職は小樽商科大学言語センター准教授です。

シナヴォン ポンヴィライ (*SINAVONG Phonevilay*) (国際学研究科国際交流研究専攻・第5期生)さんが、2015 (平成27)年11月30日(月)に名古屋大学大学院国際開発研究科で、以下のように学位を取得されました。

学位名：博士 (国際開発学)

学位番号：306

学位授与機関：名古屋大学

学位授与日：2015年11月30日

論文名：Roles of Culture in Rural Resettlements in Laos : A Case Study of Nongxong Village (ラオスの農村再定住における文化の役割：ノンゾン村を事例にして)

事務局の調査で、以上の3名の卒業生・修了生の動向がわかりました。博士号取得者の情報を知っている方は大学院同窓会までお知らせください。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学)/(筑波大学)/(東北大学)3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(社会学)(一橋大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2名・博士(国際学)(宇都宮大学)14名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)・博士(人間・環境学)(京都大学)・博士(学術)(杏林大学)/(筑波大学)2名の計29名です。

◎ 掲載記事紹介

1. 北海道新聞 朝刊(平成29年7月21日発行)10面に、「国策と大企業 夕張をほんろう」の内容で、**田巻松雄**先生の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成29年7月6日発行)4面に、「宇大公開シンポジウム 正造思想の先見性評価」と題して、「高際名誉教授ら講演」の内容で**高際澄雄**先生らの記事が掲載されました。
3. 読売新聞 朝刊(平成29年7月23日発行)24面に、「宇大・読売共催講座 悲惨な現実でも考え続けて」と題して、「最終回清水准教授が講演」の内容で**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。
4. 読売新聞 朝刊(平成29年7月31日発行)25面に、「宇都宮大・読売講座詳報 感じる、考える、そして伝えてみる。一言葉を読み解く技術、言葉で表現する心意気一」と題して、「伝える側の意図」と「認識の単純化と合理化」の内容で**清水奈名子**先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow(平成29年7月20日発行)11面の「Welcome to 研究室&ゼミ」コーナーに、栗原俊輔ゼミが紹介され、**栗原俊輔**先生、**前野結海**さん(国際社会学科4年)、**宮平永橋**さん(国際社会学科4年)、**栗原万由香**さん(国際文化学科4年)、**高野裕子**さん(国際社会学科4年)らのコメントが掲載されました。
2. UUnow(平成29年7月20日発行)6面の「就活体験記」コーナーに、「練習の様子を録画したビデオを見返す」と題して、宇都宮市役所勤務の**秋山勇貴**さん(国際社会学科・第17期生)の記事が掲載されました。
3. 東京新聞 朝刊(平成29年3月9日発行)22面に、「忘れない 宇都宮大生と震災6年 上」シリーズで「諦めない」言語を力に」と題して、「贈られた詩に押され、閉じこもる自分から被災地へ」の内容で、国際学部4年 **緑川沙智**さんの記事が掲載されました。
4. 東京新聞 朝刊(平成29年3月10日発行)24面に、「忘れない 宇都宮大生と震災6年 下」シリーズで「福島原発話し続ける」と題して、「故郷の記憶つなぐため、自分にできること」の内容で、国際学部4年 **山崎絵里奈**さん(国際文化学科・第18期生)の記事が掲載されました。

○刊行案内

1. 石田洋子・友松篤信・桂井宏一郎編著による 2017(平成 29)年 7 月 15 日に『「外国」の学び方』(ラピュータ)が刊行されました。友松篤信先生は第 8、12 章を分担執筆、高橋豊さん(国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生)は第 9 章を分担執筆しました。

(<http://www.laputa.ne.jp/index.html>)

○お知らせ

2017年11月10日(金)10:30~12:10に、宇都宮大学峰キャンパス5B12教室(5号館B棟)において、国際学部附属多文化公共圏センター主催で「難民問題とグローバル教育Ⅱ」が開催されます。阿部眞理子氏(認定NPO法人 IVY理事)による「イラクにおけるシリア難民支援から見える難民問題について~NGOの現場から」の基調講演があります。皆様のご参加をお待ちしています。

研究室訪問 48 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

2016 年 3 月末に、任期満了につき退職された若林秀樹先生に寄稿をお願いしました。なお、現在は客員准教授として「ポルトガル語」と「グローバル化と外国人児童生徒教育」の講義を続けられています。

特別寄稿

「学校現場の多言語化にどう対応するか」

～多言語翻訳技術を活用した学校向けソリューションの開発(前編)～

若林 秀樹

いわゆる“言語の壁”のほとんどは、その両側にいる人たちの思い込みによって築かれています。学校現場を例にあげれば、“言葉が通じないからコミュニケーションが難しい”と思い込んでいた、教員・子ども・保護者が、今より意思疎通を深められるツールが利用できれば、教育活動は飛躍的に前進するはずです。私は、そんな“通じた！進んだ！”というキッカケの創出を願って、多言語翻訳技術を活用した、学校向けソリューションの開発を進めています。

公立小中学校の、多国籍化と多言語化が進んでいます。外国人が多い地域では、1つの学校で10以上の母語が話されている(児童生徒が在籍している)ことも珍しくありません。かつて、外国につながる子どもの教育が注目され始めた頃は、南米からの日系人や中国からの児童生徒が多くを占めていました。そのため、子どもや保護者の母語に対応するため

には、限られた言語の通訳確保や、家庭向け文書の翻訳でしのぐことが出来ました。しかし、もう従来の方法では対応できない状況になりました。

また、支援対象の子どもが“少数で広範囲”に存在する、いわゆる“散在化”も深刻になってきました。6月に文部科学省が発表した、「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成 28 年度)」¹の結果によれば、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒が在籍する 7,020 校のうち、75.4%にあたる 5,293 校が「在籍 5 人未満」、40.6%にあたる 2,851 校が「在籍 1 人」であることがわかりました。このことは、日本語が分からなくて困っている子どものほとんどが、支援体制があまり整っていない学校に在籍していることや、支援したくてもどうすれば良いかわからず悩んでいる教員が、数多くいることを表しています。

ここで確認しておきたいことは、外国につながる子どもの教育において、日本語の習得は入り口（ツールの獲得）に過ぎないということです。外国人の定住化や永住化が進み、子どもの多くが日本で大人になっていく現状を考えれば、学力やキャリアを切り拓く能力を身につけることこそ大切になってくるからです。それは則ち、外国人の子どもにも、日本人の子どもと同じ教育目標が必要であることを意味しています。ですから、子ども・教員・保護者、そして社会が、“言語の壁”などに臆しては、目標の麓であきらめてしまうこととなります。

一方、外国につながる子ども支援や日本語指導には、以前より関心が高まり、格段に研究が進んでいると言えます。文部科学省が、日本語を母語としない子どもの学習支援方法“JSL カリキュラム”²を発表して 10 年以上が経過し、平成 26 年には外国人の子どものための JSL 対話型アセスメント“DLA”³の活用が提唱されました。外国につながる子どもの日本語習得と学力定着に向けた、教員にとってのいわばハウツーは、ある程度明確に提示されていると思います。

しかし私は、大切なことが抜けていると感じています。それは、外国につながる子どもや保護者への“母語による支援”です。“母語による支援”と聞くと、通訳を派遣しての直接支援や、家庭向け通知の母語翻訳などを思い浮かべる人がいるかもしれません。しかし、前述のように、集住地域の学校では 10 以上の言語が飛び交い、一方では少数在籍校が 5200 校を超える現状では、通訳者や翻訳者など人的リソースの確保はますます困難になっています。それでも私は、“母語による支援”が必要だと、声を大にして訴えます。“母語による支援”が困難と感じるなら、“母語を尊重する仕組みが必要だ”と言い換えてもいいかもしれません。

¹ http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm

²

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/08/09/1295608_1.pdf

³ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

私自身が、中学校での支援経験を通して気づいたことの一つに、母語能力の高い子どもほど、日本語の習得が早かったことがあげられます。また、母語に対する意識の高い家庭ほど、学校に協力的なことが多く、子ども自身も学習に前向きでした。このことから、日本語を理解しない子どもが、日本語習得や学習に臨むときや、日本語を理解しない保護者が、日本の学校対応に臨むときは、それぞれの母語を尊重する仕組み作った方が、たとえ回り道であっても効果的だと考えています。

生活者として日本に来た子どもや保護者にとって、アイデンティティの一部である母語を認めてもらうことは、大きな“安心”となり、その後の活動の“やる気”につながります。また、かれらの母語を認めながら一緒にやっというようにしようとする際に生まれる、様々なコミュニケーションは、すべての子どもや教員にとって貴重な経験となるはずです。世界的にも難しい、日本語という言語に直面したかれらに対し、いわば人格の一部である母語を尊重しながら共生する仕組みが、この国に不足していると思えてなりません。しかし、それなら具体的にどのような仕組みが必要なのでしょうか。

いま、2020年の東京オリンピック、また、外国人観光客等(インバウンド)の増加を受けたおもてなしムードの中、ITを活用した多言語音声翻訳技術分野が目覚ましい発展を続けています。国も、グローバルコミュニケーション計画⁴として多言語音声翻訳の研究を進めており、その技術は総務省が無料(2017.8月現在)提供しているアプリケーション「VoiceTra(ボイストラ)」⁵を通して、誰もが体験利用することができます。

私は現在、総務省情報通信国際戦略局と、VoiceTraを開発している情報通信研究機構(NICT)、そして学校現場教員の協力を得ながら、国が開発する上記の技術を活用した、学校用多言語翻訳システム開発「E-TraTM(イートラ)計画」⁶を進めています。そして、これまで述べた、“母語を尊重する仕組み”の第1段階として、以下のアプリケーションおよび教材の開発を計画しています。

- 1) E-Traトーク…多言語の子ども(保護者)と教員のコミュニケーションを支援する会話アプリケーション、
- 2) E-Traノート…多言語の保護者と学校(教員)の情報交換を支援する連絡帳アプリケーション、
- 3) E-Traスタディ…多言語の子どもの教科学習や自主学習を支援するeラーニング教材

E-TraTM計画については、詳細な事業計画を述べることは現時点できません。もしも叶うことなら、今回を“前編”とし、今後の進捗についてはあらためて報告する機会がいただきたいと思います。

⁴ http://www.soumu.go.jp/main_content/000395359.pdf

⁵ <http://voicetra.nict.go.jp/>

⁶ E-TraTMは商標登録出願中です(商標 2017-057050)

最後にもう一つ、触れておかなければならないことがあります。それは、日本語がよくわからないが“母語の読み書きも出来ない”子どもや保護者が、近年増加していることです。そこで、E-T r aTMでは、開発するすべてのシステムに“やさしいにほんご”のチャンネルを作成する計画です。また、授業の内容や、学校からの通知がよく理解できず困っているのは、外国人だけでなく、日本語を母語とする人たちの中にも存在することもわかっています。E-T r aTMは、多言語の人たちを支援することにだけ目を向けるのではなく、学習や学校行事など教育活動全般の“伝え方”について、これからの形を提案することも目標としています。

(2017年08月26日原稿受理)

博士録 44 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

知究人 31 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 24 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「浙江工商大学」

賈 臨宇

皆さん

こんにちは。私は1996年3月、北島滋先生のゼミから出たOBの賈臨宇(カリンウ)です。現在は中国浙江省杭州市にある浙江工商大学東方語言文化学院の准教授として勤めています。よろしくお願ひします。

2017年4月、宇都宮大学名誉教授・元副学長北島滋先生は旭川大学副学長に就任し、教育研究及び大学運営において活躍されています。

浙江工商大学の招へいで、4月27日、日本旭川大学山内亮史学長と北島滋副学長ご一行は杭州に訪れ、両大学間の提携関係を結びました。

浙江工商大学は1911年創立し、中国の最も古い商業専門学校として知られています。管理学、経済学、工学、文学、法学、理学、歴史学、哲学、芸術学等九つの学科を持っている。博士前期・後期のコースを設けている。およそ、学部生27,900名、大学院生3,500名、留学生1,600名が在籍しています。教員は約2,280名、専任教員は1,790名です。浙江工商大学は三つのキャンパスを有し、総面積は165万㎡です。

浙江工商大学の東方言語文化学院は、日本言語文学系、アラビア言語文化系、基礎日本語教研室、日本言語文学大学院、東アジア文化研究院、日本文化研究所、中日文化比較研

研究所、中日翻訳研究所などが設けられています。現在、専任の教員が28名在籍し、日本人教師が4名在籍しています。本学部は中国の大学の日本語学部中、11位にランクされました。(武書連のランキングによる注:)。本学部の教師による著書として中日両国で出版された書籍は100冊余(訳著を含む)を数えることができます。

本学部は対外交流、対外協力を重視し、日本の各大学との相互交流および日中学術研究活動を積極的に推進しています。具体的には、愛媛大学、二松学舎大学、静岡理工科大学、四天王寺国際佛教大学、国文学研究資料館、神奈川大学国家重点研究基地、早稲田大学宗教文化研究所、武蔵野学院大学等の大学および学術研究機構に対して大学間あるいは学部間の相互学術交流協定を結び、毎年60名あまりの学生を日本に留学させ、より高度で専門的な知識と能力を身につけさせています。また、この国際協力は本学部の学術及び科学研究のレベルを高めることにも大きく寄与しています。さらに、交流の一環として、本学部の図書館には早稲田大学文庫、成城大学文庫、集英社文庫等の名称で様々な分野の書籍が取り揃えられています。日本語の原書は5万冊を超え、中国国内の同種の教育機関の中では屈指の図書館と言えます。

編集者注: 武書連とは人名で、彼が主宰する「中国大学評価」課題チームによる中国大学ランキングを指す。

(国際学研究科国際社会研究専攻 第6期修了生)

(2017年08月16日原稿受理)

海外留学今昔 20 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「アメリカでの交換留学を終えて」

国際学部国際文化学科4年 山内 彩加

私は昨年8月から今年の6月まで、新しく宇都宮大学との協定が結ばれたアメリカのヴィンセンス大学へ交換留学をしました。大学のあるインディアナ州ヴィンセンス市は州で最も古く、アメリカ独立戦争の戦いの舞台にもなった、歴史的にも重要な街です。そのため、市内には独立戦争当時の建物が保存されていたり、歴史資料館があったりと、とても歴史が感じられる街です。私が通ったヴィンセンス大学はインディアナ州最初の大学として知られ、様々な分野の学部、専攻が入った総合大学です。

私がアメリカへの留学を決めたのは、語学力向上とアメリカの文化を直接見たり聞いたりしたいと思ったからです。私は小学生くらいの時から、アメリカの音楽やドラマ、映画

などに興味を持っていました。そして高校で世界史を勉強した時に、日本よりも建国してからの歴史が浅いにも関わらず、経済的、政治的、文化的、軍事的に世界で最も影響力のあるアメリカという国に魅力を感じました。何が現在のアメリカを構成しているのか、何が原動力となってこの超大国を動かしているのか、どのような人々がアメリカを支えてきたのか、とても興味を持ちました。そして宇都宮大学でアメリカについて勉強する過程で、多文化共生と教育というテーマからアメリカを研究したいと思い、今回の交換留学に応募しました。

留学先での一番の収穫は、そのテーマについて英語で現地学生と一緒に授業を受けられたことです。私は人文学部の学生として、いくつか講義を受けましたが、アメリカ国内の人種の違いや所得格差から生まれる教育格差について研究している教授の授業が最も印象的でした。その授業は教育をテーマに論文を読んだりドキュメンタリー映画を見たりして、その感想をクラスで討論して自らのエッセイを書くというもので、とても有意義な授業でした。一方でアメリカの授業の進め方に初めの頃はなかなか慣れず、授業についていくだけで精一杯でした。発言をしないと意見が何も無いと思われるため積極的に話さなければならず、学生同士の速い英語も聞き取るのに苦労しました。ただ、アメリカ人と一緒に学んだという点では、彼らの教育や多文化共生についての考え方と、人種や所得格差についての意見を生で聞いたことは大きな収穫でした。現地でできた友人とクラスの外で意見交換をしたり、疑問に思ったことを聞いたりもして、日本ではできない貴重な経験ができたと思います。

現在日本に帰国し、後期からはアメリカについてより深く研究する予定ですが、この留学経験は必ず生かされると思います。この体験記を書くにあたり、苦労したことや日本に帰りたいと思ったことがたくさんあったはずなのですが、今留学生生活を振り返ってみると、一番初めに浮かぶのは充実していて楽しかった、ということです。帰国してからまだ二ヶ月ですが、アメリカで出会った人たちや毎日食べていた学食のハンバーガーがとても恋しいです。最後に、留学にあたって支えてくださった宇都宮大学、ヴィンセンス大学の皆様に感謝申し上げます。まだまだ書き足りないところではありますが、この体験記が留学を考えている学生の助けになれば幸いです。

(国際学部 国際文化学科 第4年次在学学生)

(2017年08月19日原稿受理)

「留学体験記」

山本 絵理

国際学部国際文化学科4年の山本絵理です。私は2017年1月日本を出発し、1年間の交換留学が始まりました。2016年の夏に、宇都宮大学とアメリカのインディアナ州にあるヴィンセンス大学の交換留学の提携が結ばれました。留学開始が半年遅れたため、1.5期生にあたります。現在、私は2学期ある交換留学中の1学期が既に終わり、5月に一時帰国し、

東京でインターンシップをしています。また 8 月に授業を受けるために渡米します。ヴィンセンス大学での生活の様子をご紹介します。

まずは、街の環境についてです。大学のある Vincennes という街は独立戦争の戦場であり、そのモニュメントとして George Rogers Clark National Historical Park という国立歴史公園があります。街並みはとても穏やかで、昔からある店や教会がメインストリートに残っています。少し街から離れると、大豆やコーン畑が広がっています。車がないと生活が不便な場所ですが、時間がゆっくりと流れるのを感じることができます。週末に、州境の川の堤防近くのベンチで自然を見るのが好きでした。

そして、授業は 1 月から 5 月まで、ESL(English as Second Language)だけを受けていました。海外からの留学生約 10 人に対して先生 1 人の構成で、学部で授業を受けるに必要な英語力を養いました。特に、留学生はスペイン・バハレーン・コンゴ・中国・台湾・香港・ブラジルから来ていて、日本の教室では考えられないほど多国籍でした。パソコンを使って自分で勉強することが主でした。他にも、1 つのトピックについてのプレゼンテーションを毎週したり、単語ゲーム・リーディングをしたり、エッセイを書いたりしました。日本とは異なる英語の教育方法に興味を湧きました。

ヴィンセンス大学では日本語の授業が開講されていて、ESL の後に日本語のチューターをしていました。学生の宿題の手伝いや日本に関する質問に答える機会がたくさんあり、英語で日本語を説明することの難しさとアメリカ人観点の日本を知ることができました。今年の 7 月には、10 名ほどの生徒が Explore Japan Tour として来日し、東京・名古屋・京都・奈良・栃木を訪問していました。私は東京観光に参加し、ガイドをしながら一緒に観光もしました。アメリカに帰る時には「日本にまた来たい！」とみんなが言っていて、自分も日本を捉えなおす良いきっかけとなりました。

次の学期の 8 月から 12 月の約 4 か月は、学部の授業を取ります。教育学部を専攻して、アメリカの教育制度や教育心理を学ぼうと考えています。また、日本語のチューターを通して、生徒の成長を感じることができればと思います。「日本に行きたい！」「日本で働きたい！」との声が聞けることを目標に頑張ります！

(国際学部 国際文化学科 第 4 年次在学学生)

(2017 年 07 月 31 日原稿受理)

学生サロン 12 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2017年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

「重田ゼミ研究会」を開催しております。

加藤 靖

皆様、こんにちは。

私は、2009年に「国際交流・国際貢献活動経験者特別選抜」で社会人学生として国際交流研究専攻に入学しました。

私の場合、入学は生涯学習の1つと考え、学位の取得より、広く国際学について学びたいと思い入学しており、長期履修学生であったことと、仕事の関係で1.5年間休学していたこともあり、5年後の2014年3月に無事修了いたしました。

平日の夜や休日に講義時間を変更していただき、沢山のことを学んで国際学研究科を修了できたのは、先生方のお力添えのおかげと、深く感謝しております。

さて今回は、重田ゼミ研究会についてご紹介させていただきます。

重田ゼミ研究会は、私が国際学研究科を修了するとき、指導教官である重田先生から「国際学研究科の卒業生を主体にした研究会を作れないか」と言われ、まずは重田ゼミの卒業生を主体に本研究会を発足することにしました。

本研究会は、まだ細々とした活動ではありますが、宇都宮大学国際研究科の卒業生を主体に、社会人(市民)目線での論点を学生時代に学んだ学術的思考で調査・研究した結果を発表し、意見交換による研鑽の場になることを目的に開催しております。

具体的には、毎年1回、3~5件/回程度の発表を目標に活動しております。第1回目は2014年5月に開催し、今年で4回目になります。

今年は50名程度の方へメールにて開催の連絡をしたところ、約25名(在生含む)の参加をいただき、5月14日に6件の発表をしております。発表題目は「知求会ニュース第62号」に掲載されていますので割愛しますが、国際学部を卒業された学部生や重田ゼミに関係の深い他の大学院を卒業された方の発表もあり、発表者の仕事やNPO活動を通じた経験に基づく発表は大変興味深く、活発な意見交換もかわされ、盛会のうちに終わることが出来ました。

本研究会は、国際学部・国際学研究科に関係する方々のぜひ参加をお待ちしております。来年は、4月21日(土)の午後に開催を予定しておりますので、ご興味のある方は、発表もしくは聴講に是非ご参加して下さい。なお、連絡先はGZW03166@nifty.ne.jpです。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第6期修了生)

(2017年08月21日原稿受理)

特別寄稿

「国際学部同窓会理事会・懇親会 開催報告」

国際学部同窓会理事 高野 聖

宇都宮大学国際学部同窓会理事会・懇親会が宇都宮市で開かれるという事でお盆期間の8月13日（日）に宇都宮へ足を延ばして来ました。

理事会は宇都宮市中央生涯学習センター(宇都宮市中央)で行われ、約2時間いくつかの議題について意見を出し合いました。近くにオリオンスクエアというオリオン通りに面した施設があり、同じ時間帯にオリオンスクエアで音楽イベントが開催されていて賑わっている様子が伝わってきて、同窓会も賑わう様色々頑張ろうと思いました。

理事会の終了後、懇親会まで少し時間があつたので駅前大通りまで移動して交差点角にある Lion's Head というダイニングバーに入り、毎日降っている雨を横目に屋内で飲みながら談笑。あつという間に懇親会の時間が近づいてきたので釜川沿いを少し歩いて開催場所のお店「かみやま」（宇都宮市本町）に到着。田巻先生のお勧めでこちらのお店になったのですが、普段立ち飲み屋で飲んだりしている自分にはちょっと高級な感じのお店でした。

今回の懇親会は佐々木一隆先生、田巻先生、大学院同窓会メンバーの土屋さん、岡本さん、仲田さん、大学同窓会メンバーの吉葉さん、丹治さん、田中さん、行澤さん、豊田さん、高野の11名で18時から始まりました。

それぞれの近況や学生の頃の話肴にお酒も美味しい食事もとんとん拍子で進み、あつという間にお開きの時間となってしまいました。

2次会は駅前大通りの方に戻って、開いていた居酒屋に入って飲み直しとなりました。小一時間程滞在してお店を出ても雨は降り続いていて雨の中それぞれ帰路についた形の懇親会でした。

次は寒い季節の懇親会開催ですが、異常気象をひしひしと感じるこの頃なので次回はどうな天気の中での開催となるのか気になります。

以上

(国際学部 国際文化学科 第2期卒業生)

(2017年09月02日原稿受理)

●お願い—宇都宮大学3C基金への寄付に関して

4月に大学から「宇都宮大学3C基金」寄付への協力要請を受けています。詳細は以下のアドレスへアクセスしてください。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/fund/3c_kikin.php
なお、海外からでも寄付ができる方法がありますので、よろしく願いいたします。

New

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。主な内容は以下の通りです。1. 創刊のご挨拶 2. バンコクにて決起会 3. 同窓生インタビュー 4. タイの昨今 ～教育事情 No.1～ 東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていたことを祈念しています。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 23 号の内容は、1 欧州 観光客排斥 住民悲鳴 2 EU 支部だより 「観光客嫌悪症」です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

- うれしい出来事の一つ目に、東南アジア支部の発足が挙げられます。7月中旬に発起人の大畑さんから相談を受けて、いろいろ助言した末に発足しました。当初は 12 月 15 日配信予定の知求会ニュース第 64 号を予定していましたが、彼女の熱意により前倒しで東南アジア支部ニュースレター創刊となりました。知求会としては EU 支部に続く 2 つ目の支部になります。ただ、この支部は国際学部同窓会の東南アジア支部にもなっています。知求会（大学院同窓会）の会員名簿を作成したところ、タイ・マレーシア・ベトナム・カンボジア・ラオス・日本の国籍が確認できました。現在は日本での在留学生も含めて、ベトナム・タイ・日本の国籍構成が過半数を占めています。今後の展開が楽しみです。
- うれしい出来事の一つ目に、多くの博士号取得者が確認できたことです。本人からなかなか情報が得られなかったところ、この度やっと各大学院研究科 HP を検索した結果、詳しい情報を得ることができました。引き続き、調査を続けていきます。なお、現在の調査対象者は**イワノワ ゲルガナ エンチェワ**さん（国際文化研究専攻第 2 期生）、**鳥日哲**さん（国際文化研究専攻第 5 期生）です。先生方および会員の皆さんでご存知の方がいましたら情報提供をお願いします。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com
